

(^\_^)v 趣味に生きる (第7回) ~☀~☂~☁~☔~☀~☂~☁

## 無趣味ものが趣味を語る

濱崎直孝

(長崎国際大学薬学部教授, 日本臨床検査標準協議会 (JCCLS) 会長, 国際臨床化学会 (IFCC) 学術委員)

### ◆本来“がさつ”

本来, “がさつ”で文化程度が低く, 音楽や絵画, おいしい食べ物やお酒, 素晴らしい景観に感動したなどの話になると, 話題にはなかなかついてゆけず小さくなっています。特に, 海外

に行くとそのような会話になりがちで, いつも肩身が狭い思いをしています。日本の最西端の JR 駅がある佐世保・ハウステンボス地域(写真1, 2)は, 夕日がきれいなところです。車で移動している時などに, 助手席の家内から, 「夕日に映



写真1 ハウステンボスの全景

一年中, 種々の花が咲き乱れ実にきれいなところです。現在, ハウステンボスに付随したアパートに住んでいますが, 毎日, 花やクリークを眺め, そこに来る白鳥や魚などにパンを与えたりして英気を養っております。クリスマスから年末にかけては全園ライトアップされ美しく幻想的です。



写真2 ハウステンボスにて  
後ろ左上が住まい(アパート)

えた雲がきれい。」と言われて、なるほどきれい、とは感じる状態ですが、それ以上には深まりません。胃腸は丈夫で食欲旺盛、食べることは好きですが、何でも胃腸が受け入れてくれ、海外に出かけても日本食に餓える気持ちを持ったことがありませんし、「あの国のあの料理をもう一度食べてみたい。」ともなかなか思いません。そのような訳で、こだわりを持った好みの料理や最良にしているお店もなく、お客様とどこかでお食事などという時に、どこにお連れしたら良いのかいつも困っております。できる料理は、目玉焼きと野菜炒めだけです。結婚当初は、“おいしい”という言葉に、内心感謝していただろう家内は、その内に、“おいしい”という言葉のレベルが判り、作りそこなった料理でも“おいしい”のだと、呆れている模様です。

#### ◆三度目のプラハ

仕事から、頻繁に国内外を移動しますが、いわゆる、旅を楽しむ旅行とは程遠いもので、飛行場、あるいは、鉄道の駅から会議場への往復だけでは、どこの国のどの街も同じことになっております。

この文章を書きながら日本地図で調べてみましたら、一度も訪ねたことがない都道府県はあ

りませんでした。国外でも、ユーラシア大陸(アジア, ヨーロッパ), 北アメリカ大陸には頻りに訪ねておりますし、アフリカ大陸にも地中海地域チュニジアではありますが一度だけ訪ねております。一度も足を踏み入れていないのは、南アメリカ大陸とオーストラリア大陸です。それぞれの地域での名所旧跡を訪れる機会もあったのですが、あまり印象に残っておりません。極め付きは、プラハです。三度目の訪問で、この地には以前に来たことがあると気づきました。しかも、夏のプラハに最初に訪れた時は、市内の各地で手軽に開催されているコンサートに感激して、帰国後にそのことを家族に話していたようで、家族の物笑いの種になりました。この点に関して少し弁解をさせてもらおうと、空路入国した一度目と違って、二度目は、ミュンヘンから Walter Guder 教授の車で“正しい検査の仕方”(共訳: 濱崎直孝, 濱崎万穂; 宇宙堂八木書店)の原本(Diagnostic Samples: From the Patient to the Laboratory; Wiley-Blackwell)の編集委員会(写真3)が行われた Karlovy Vary へ移動し、そこから陸路入国していたので、入国時の印象が違っていただけに違いないのです。それにしても、プラハ市中に宿泊した訳で、そこでの街並み(写真4)に気づいてよい筈です。なんとも



写真3 “Diagnostic Samples: From the Patient to the Laboratory”の第二版出版に向けての編集委員会参加メンバー(Karlovy Varyにて, 1998年)

左より: Prof. Walter G. Guder(Germany), Prof. Sheshadri Narayanan(USA), Prof. Donald S. Young(USA), 本人, Dr. Bernd Zawta(Germany), Prof. Hermann Wisser(Germany)。



写真4 プラハ、ヴァーツラフ広場(絵葉書)

正面の建物は国立博物館。春から夏にかけてプラハ各地で手軽な演奏会が行われます。初回のプラハ訪問時に、感激して家族に語った演奏会は、正面の博物館内で行われたことを思い出します。「チェコ事件(1969年)」でヤン・バラフがこの博物館正面で抗議の自殺をしたということです。



写真5 カルタゴ遺跡

チェニス郊外から奥のビュルサの丘にカルタゴ遺跡があります。紀元前にフェニキア人が築き上げた地中海一の大都市の遺跡です。ポエニ戦争でローマに滅ぼされたということです。この写真で見られるような、現代でも通用するような立派な生活環境が整えられています(家内撮影)。

低い文化程度で恥ずかしい限りです。例外的に印象深く覚えているのは、スース(チュニジア)で開催された IFCC General Conference の後に訪問したカルタゴ遺跡(写真5)です。その遺跡にまつわる歴史的事実から現代の世界紛争の源泉を見る印象を受けましたが、一方で、そこに残っている下水道完備の素晴らしい遺跡を目の当たりにして、3,000年もの昔の人々の科学技術の高さに驚くとともに、改めて、ヒトは知的動物なのだと感じ入ったものです。ただ、このケースはあくまでも例外的で、ほとんどの場合、その時々には印象的に感じていても、いつの間にか忘れてしまうのです。ひとつには、カメラを持ち歩かないためかもしれません、要するに、興味が薄いのです。

#### ◆オルセー美術館

このような状態でも時間があれば、また、旅行中でも美術館や博物館を訪ねることはあります。

昔の自宅近くにある福岡市美術館や博物館には、散歩のついでに時々足を運びますが、そこで何を鑑賞したのか、思い出せるのは「金印」

しかありません。上野の美術館で、ロダンの有名な彫刻が並んでいるのを見て「エェー、これらみんな本物なのか?!? ひょっとして…」と想ったりする程度なのです。先日も浜松医科大学の前川真人先生とパリでオルセー美術館に行きました。その日は、結構満足感を持ってオルセー美術館を後にしたのですが、いま振り返ってみますと、ミレーの「晩鐘」や「落穂拾い」があった程度しか覚えていないのです。睡蓮の絵は好きですが、その作者がモネなのかセザンヌなのかルノワールなのか判らないのです。

本を読むのも人並みには好きです。フィラデルフィアのポストク時代は、ご多聞に漏れず、松本清張や司馬遼太郎の文庫本はかなり読んだと思いますし、その時々好きな作家ができ、しばらくは、その方の作品ばかり読むような傾向があります。でも、その程度の作品でその程度の読み方です。読書を趣味にできるような代物ではありません。

#### ◆素晴らしい趣味人

今年8月末開催の第56回日本臨床検査医学会学術集会は、松野一彦教授(北海道大学)が札幌で主宰されました。

学術集会の前日に会長招宴にお呼びいただき大変おいしい料理を味あわせていただきました。札幌を代表する日本的に有名なシェフのお店でした。その時は、是非、名前を覚えておいて機会があればもう一度と考えておりましたが、今は、その名前を思い出せないのであります。これは単に老化現象(ボケ)だけではないものがあります。この点はさておきまして、その時、テーブルを囲わせていただいた先生方が素晴らしい趣味の持ち主でいらっしゃいました。その先生方は、牧野幹男先生(旭川医科大学名誉教授)、伊藤機一先生(大東文化大学教授)、池田 斉先生(埼玉医科大学教授)、水口國雄先生(帝京大学教授)の諸先生方です。着席するや、水口先生が牧野先生の手元をご覧になり、「先生、すごい熱の入れようですね。その爪はギター演奏用に整えておられるのでしょうか。」と感嘆の声を上

げられました。牧野先生は80歳を超えていらっしゃる現在でも矍鑠としておられ、ギター演奏を日課として過ごしておられるとのことでした。

会長招宴の我々のテーブルは、水口先生のこの感嘆の声から会話が弾みました。手の爪を見ただけでギター演奏者を見分ける水口先生はコーラスを趣味としておられ、音楽に造詣が深い先生でした。

#### ◆人の見かけ

伊藤機一先生は、先生の日常の立ち居振る舞いその風貌からはどうにも想像できないのですが、ピアノ演奏がご趣味でありました。さらに、鉄道マニアでいらっしゃるのか。九州大学時代の教室員に鉄道マニアがいました。彼は、我が教室に在籍している間、“九大病院検査だより”の一面を占有して“鉄分検査室ニュース”欄を独断で立ち上げ、研究よりも熱中して、並の人間では書けない面白い読み物を連載しておりましたが、そのために博士号を取得するのに時間がかかりました。機会があったら、伊藤先生とその鉄分研究員との対談を、本誌医療と検査・機器試薬の“趣味に生きる”欄に掲載していただければ、益々この欄の愛読者が増えるのではないかと考えております。

池田 斉先生のご趣味はバイオリン演奏です。伊藤機一先生には申し訳ないことに、池田 斉先生のバイオリン演奏はすんなり受け入れることができました。「人は見かけによらない。」といいますが、文化程度が低い人間には、“見かけ”の奥に潜んでおる“心の豊かさ”など看破する術もございません。伊藤先生には大変失礼なことでした。でも、心豊かな伊藤先生は、“無趣味もの”の考えることなど、笑い飛ばしていただいていることでしょう。戦後の混乱期の幼稚園時代に、紙に描いた鍵盤の上をなぞりながら、“ピアノ擬き”を母親から習った身では、勿論、語るものなどなく、専ら、先生方のお話を伺いながら、ピアノとバイオリンにギターとコーラスで、どんな楽しい音楽が聴けるのだろうと想



写真6 伊藤機一先生(ピアノ)、池田 斉先生  
(バイオリン)協演

像しておりました(写真6)。これも、本誌の“趣味に生きる”コラム主催で、牧野、伊藤、池田、水口カルテット演奏会を開催していただければ、厳しい環境下で日夜業務に励んでおられる臨床検査関係領域の皆様を癒し、文化程度を高めるのに有用でしょう。

#### ◆無趣味もの

このような無趣味のものに趣味を語れど、宇宙堂八木書店/ラボ・サービスの田中健治編集部長からのご下命です。なにを書くのかと思悩んでいるうちにどんどんと締め切りが近付いてきております。

締め切り確認のために原稿依頼文書を再度チェックしましたところ、ラボ・サービス“趣味に生きる”の連載は、驚いたことに、伊藤機一先生がその端緒(第一回掲載)を開き、その後、第二回池田 斉先生、第三回水口國雄先生と続いていました。益々、心が萎える思いです。しかも、6,000字から8,000字も書かなければならないのです。冗長な駄文と申しますが、そうそう冗長な駄文も書けないものです。困っております。

なにが契機か定かには覚えておりませんが、ある時期から、開き直った人生を送ってきました。ここは、開き直って自身を曝らけ出すしかないようです。

### ◆テニス、女性のスポーツ？

幼稚園の運動会で断トツの一番であったことを、今でも快感を持って鮮明に覚えております。それ以来、駈け足ではだれにも負けないと、妙な自信をつけておりました。でも、後に、相撲をしていて左足を骨折してしまい、以来、鈍足で通っております。競馬馬は脚を骨折すると競走馬としては使い物にならなくなる、と言われていますが、経験的にそれは真実だと確信しております。ヒトもウマも同じなのです。

中学のクラブ活動でテニスをするように母が執拗に勧めました。どうやら、その鈍足では野球をやっても一人前にならないと考えていたようです。母の判断は大間違いで、本当は、テニスほど足の速さが活きるスポーツはありません。ともかく、子供心に“女性がするスポーツ”，テニス、を始めました。これからはテニスとの長い付き合いが始まりました。当時、田舎の佐世保の中学では硬式テニス部はなかったようですし、勿論、テニスに“軟式”と“硬式”とがあることすら知りませんでした。テニスを始めた動機はさておき、いつの間にかテニスの虜になっておりました。父が勤めていた病院の一角にテニスコートがありました。ある時、ふと気づきましたらコートから届く打球の音が違うのです。爾来、大学に入ったら硬式テニスをやろうと心に決めました。

### ◆九州大学庭球部

入学式もそこそこに、九州大学庭球部に入部のお願いに行きました。クラブ紹介などの大学のイベントが始まる前に訪れたので、その熱意を買ってくれたのか、伝統ある九州大学庭球部にすんなり入部させていただきました。硬式テニスの初めての打球はテニスコートのフェンスを越えるホームランです。軟式の打ち方と硬式の打ち方は違っていたのです。入部して、まず、感心したことは、高校までの運動クラブと違い、上級生が下級生に対していたずらに威張らないのです。それでいて運動クラブとしての統制はしっかり取れていました。さすが大学の運動ク



写真7 九州大学庭球部百年史

九州大学庭球部は、1903年(明治36年)11月3日に京都帝国大学福岡医科大学校友会の運動部として創立されました。初の対外試合は京都帝国大学京都医科大学との間で行われたという記録があります。ただ、これは厳密に言えば同一大学内対抗戦ということになりますが、当時、わざわざ福岡から京都まで出向いて行われている訳です。歴代の部員の中から数多くの著名人を輩出していますが、残念ながら、一般男子で日本一になったプレーヤーはいません。

ラブだと感心し、九州大学庭球部に惚れこんでしまいました。教養部時代は、できる限り講義に出るのを遠慮？してテニスに打ち込みました。九州大学庭球部は100年余の伝統ある運動クラブです(写真7)。長い歴史だけでなく、歴代の名選手の中には、デビスカップ候補選手に選出された先輩がおられます。入部当時までは西日本地区では無敵であった名門運動クラブです。

### ◆昂揚感、挫折感

日没近くまで練習し、最後に、教養部の近くにある大濠公園を一周(一周2km)して戻ってくるのが毎日の練習日課です。テニスコートから大濠公園までの往復が2km以上はあったと思いますので、練習最後の総仕上げだけで、ほぼ毎日約5kmは走っていたことになります。これが、その後非常に大きい糧になりました。皆に感心されるタフさはここからきていると思っております。体力が培われただけでなく、この年になって振り返ると、九州大学庭球部でのクラブ

生活はその後の人生そのものを変えてくれたような気がしております。

これにも勝るものがない昂揚感、これほど惨めな事がない挫折感、一打一打に意味がありそれらを組み合わせてゲームを組み立てるのです。勿論、その時点の技量が土台にあるのは間違いありませんが、技量が同じレベルであれば、その一打一打をより上手に組み合わせた方が勝利を味合うことができるのです。ただ、これは単に駆け引きだけではないのです。試合の勝利に向かって集中し周囲の目など気にしないで、自身の技量を最大限発揮できるように事を組み立て、諦めずに粘り強く続けることが勝利を導く全てです。ある意味、人生そのものです。結局、強くはなれませんでした。大学以後の人生は九州大学庭球部で学んだことが活かしています。

#### ◆西日本医学生体育大会

一般レベルでは強くはなれませんでした。医学生レベルではそれなりのレベルに届いておりました。今も続けておりますが西日本医学生体育大会というのがあります。その大会で九大医学部テニス部は医学部4年間で3回優勝、1回準優勝です。勿論、団体戦での話です。その唯一の準優勝の試合では、単、複で敗退してしまい決勝戦敗退の要因を作っていました。これ以上ない惨めな挫折感です。でも、4年間

で3回優勝、1回準優勝は医学生体育大会の記録であった筈です。その後の誇りの一つではありません。医学生とはいえ、この大会にて個人戦で優勝できれば、一般レベルでも全日本学生レベルになります。個人的には存じ上げておりませんが、順天堂大学教授の河盛隆造先生(当時、阪大)は同学年で、医学生ではトップレベルのテニス選手でした。今は糖尿病の大御所です。

#### ◆素晴らしきテニス仲間

九州大学庭球部の生活は素晴らしい友人、先輩、後輩に知り合える機会を作ってくれました。他学部や他大学の多くの友人ができたのも九州大学庭球部生活のお陰です。医学部から九州大学庭球部に入部する学生はあまり多くないのですが、たまたま我々の時は4名もおり、古山正人、大島康史、穎原嗣尚の諸君とは九州大学庭球部と一緒に腕を磨き切磋琢磨して学生生活を送り、医学生体育大会でも一丸となって頑張りました。残念ながら、古山正人君は大腸がんで他界しました。60歳余り、今ではあまりにも短すぎる人生です。西日本医学生体育大会個人戦準優勝の大島康史君は郷里松山で小児科を開業し地域医療に貢献しています。穎原嗣尚君(佐賀大学名誉教授)とは、今年から長崎国際大学(写真8)で、一緒に若い薬学生の教育に携わっております。齋藤英彦先生(名古屋大学名誉教授)



写真8 長崎国際大学全景

60有余年の伝統を誇る九州文化学園。これを母体に、長崎県と佐世保市、地元の経済界などのパートナーシップによって生まれたのが長崎国際大学です。開学から10年目を迎え、独自の理念とシステムによって進める「全人格的教育」をモットーとして、教員と学生との間が非常に緊密な関係で、きめの細かい教育が特徴です。人間社会学部、健康管理学部、薬学部の3学部4学科、1大学院から構成されています。この中で、薬学部が一番新しい学部で設立4年目です。



写真9 テニス近影

は研究領域が重なる同学の先達ですが、西日本医学生体育大会で決勝戦を3度戦った名大医学部テニス部で活躍されていたということです(九大2勝, 名大1勝)。粘り強く勝負強いテニスをされます。臨床検査領域では、高橋伯夫(関西医大)、熊谷俊一(神戸大)、杉浦哲朗(高知医大)、野村文夫(千葉大)、矢富 裕(東大)らの諸先生はテニスがお好きなようで、一度、集まってテニスをしようと話をいたしておりますが、まだ、実現いたしておりません(ラボ・サービス杯争奪戦開催を希望します)。

#### ◆死ぬまでテニス

“塞翁が馬”といいますが、このように振り返ってみますと、幼年時の骨折が切っ掛けでテニ



写真10 テニス近影

スに出会い、そのテニスに助けられた人生であったような気がします。諺どおりに何が幸いするか分からないものです。

九大医学部テニス部の後輩、岡村 純君(九州がんセンター研究部長)に誘われて、50歳からテニスを再開しその面白さを思い出しました。今でも覚えている幼稚園時の天に抜けるような爽快感を求めて死ぬまでテニスができるの良いと願っているところです(写真9, 10)。

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思ひます。  
編集室では本コラムへのご投稿連絡をお待ちいたしてひます。